近代日本における少女像の変容について
―『少女の友』投書欄の分析より―

髙村風歌

はじめに

「少女」という呼称が一般化したのは二〇世紀以降であるといわれているが、近代において「少女」はどのようなものとして捉えられていたのだろうか。本稿はその変遷を明らかにするため、一九〇八年から一九五五年にかけて、実業之日本社より出版された少女向け雑誌『少女の友』の投書欄を分析する。

少女雑誌は、おとぎ話や少女小説、歴史上に残る女性の伝記や修身訓話、手芸や家事にまつわる記事、人気挿し絵画家たちによる口絵などから成っており、多くの少女たちにとって、接することのできた数少ないメディアの一つであったといえるだろう。なかでも『少女の友』は多数の発行部数を誇り、それゆえ戦時下において他の少女雑誌が廃刊に追い込まれるなか、刊行を継続できた。このように戦前の少女雑誌のなかで最も長く続いた少女雑誌である『少女の友』を分析の対象とする。

少女雑誌は、当時の少女像の構築に多大なる影響を与えていたと考えられるが、雑誌の作り手が一方的に少女イメージを読者たちに提供していたわけではない。また、少女雑誌の提示した少女イメージを読者が必ずしも受け入れていたとは考えられない。読者たちの雑誌を買うか買わないか選択する購買行動や、投書欄への投稿は少女像の構築になにかしらの影響を与えていたと考えられる。編集者が描く少女像だけではなく、読者である少女たち自身が描く少女像を考察するためには投書欄を分析する必要があると

考える。『少女の友』は読者の投稿による通信欄・文芸欄を設け、投稿少女の絶大な支持を得ていた。投書欄を分析することで、編集者の少女像、読者たちの少女像、そして投稿欄掲載者と懸賞当選者の居住地の分布からどの層の子どもたちに雑誌が読まれていたのかを明らかにしたい。

また分析する時期を『少女の友』が創刊された一九〇八年から一九二〇年代に限定する。当時、戦前の初等教育においては女子にのみ女子小学や裁縫科を設けていた。また中等普通教育においては男子が中学校、女子が高等女学校という別学体制をとっており、その教育内容は男子と女子でまったく異なるものであった。このことにより、戦前の学校教育制度は子どもを性別によって差異ある、少年と少女として捉え、ジェンダー概念を創り出した。また、一九〇二年創刊の『少女界』（金港館）の誕生以降、誌名に少女と付く少女向け雑誌が大量に生み出されていった。そしてそれら少女雑誌は、少女というイメージを具体的な形で描き出して流布させた。このように少女という呼称が一般化していく時期をみていく。

『少女の友』に関しては、表紙絵や小説の内容、広告など様々な視点から研究がなされてきた。また、少女雑誌の投稿欄分析を行った研究は相次いで登場しており、『女学世界』（博文館、一九〇一年創刊）を川村邦光氏[1]が行い、『少女世界』（博文館、一九〇六年創刊）を本田和子氏[2]と永井紀代子氏[3]が行っている。本稿でも対象とする『少女の友』（実業之日本社、一九〇八年創刊）は遠藤寛子氏[4]と今田絵里香氏[5]、佐藤（佐久間）りか氏[6]が行っている。しかし、遠藤氏と今田氏は一九三〇年代の分析を対象としており、本稿が対象とする時代とは異なっている。佐藤氏の研究は、少女雑誌が誕生した一九〇二年から一九一三年を対象としているため、本稿でも依拠するところが大きい。しかし、佐藤氏の研究は当時を代表する『少女界』『少女世界』『少女の友』の三誌を比較し分析しているため、本稿では『少女の友』に重点を置き、より深く分析を進めたい。

第一章では懸賞当選者の居住地域の分布について分析する。当選者は毎号、抽選によって選ばれる。そのため、地域分布を数値化し、その変化をみていくことで、『少女の友』自体の隆盛と、どの地域の読者に読まれていたのかが明らかになると考える。続いて第二章では、読者が投稿した通信の宛先や、その通信内容の変化について分析する。通信欄には記者への要望や他の読者へ働きかける様子が表れて

いる。少女たちが何を求め、どう行動したのかを明らかにするために通信欄の分析は非常に重要である。最後に第三章では記者や読者が抱いていた少女像について分析する。掲載されている記事の中から、少女に対するイメージが表れているものをまとめる。これらを分析することで、近代において少女がどのようなものとして捉えられていたのか、少女たち自身がどのような少女像を抱いていたのかを明らかにしたい。

第一章　懸賞当選者の地域分布について

『少女の友』では、絵探しやクイズの正解者に抽選で絵はがき等の賞品が贈られる懸賞が行われていた。懸賞は毎号行われ、懸賞当選者の居住地と氏名が翌月の号に掲載された。懸賞当選者の居住地を二年ごとに数値で表したのが表①である。

はじめに表①の総合数の変化を見ていきたい。一九〇八年から一九一一年にかけて総合数は増加している。発行部数が記録されている資料は残っていないので確認することは出来ないが、ここで明らかになった数値は発行部数に大きく関わりがあると考えられる。発行部数に関する記述は、一九〇八年一巻六号の談話倶楽部で記者が「五万人の読者」と述べているものがある。また、佐藤氏によると明治四十年代の記事にはしばしば「拾万に余る愛読者」と記載があることから発行部数は十万部近かったと言及している。創刊から三年程で発行部数が二倍に増えているとしたら、創刊当初の懸賞当選者の総合数は発行部数に比例し、増加したと考えられる。実際に増刊号が一九〇九年二月に発売され、通信欄では当時の記者や読者たちも愛読者が増加してきていることにより、『少女の友』の成長を実感し、喜びを表す文がたびたび掲載されている。

昨年の二月創刊せられて以来、僅か一年にもならぬ短い月日の間に、本誌は実に雑誌界空前の大発展をいたし、いよ〳〵少女雑誌中の第一位を占むるに至りました。（一九〇九年二巻二号）

編集局の活動と皆様の御同情によりまして『少女の友』は益々発展いたしてまゐります。三月号の如きは、発行した日に全部売り切れてしまいまして、すぐに再版をいたしましたがこれ又立まちに無くなつて、三版までもいたしました有様でございます。（一九一一年四

表①

都市	1908	1909	1911	1912	1914	1916	1918	1920	1922	1923	1925	1927
東京	51	60	80	70	40	40	40	44	44	44	28	28
大阪	12	27	42	22	22	32	34	44	40	34	26	26
京都	8	8	42	20	20	26	20	20	24	30	26	24
北海道	5	8	36	14	14	36	24	30	24	16	22	22
兵庫	5	25	24	14	14	18	18	20	24	24	20	20
福岡	1	8	16	8	16	18	20	20	24	10	20	20
愛知	6	10	8	8	14	16	18	20	24	20	20	20
神奈川	16	15	26	12	16	18	18	20	24	24	18	18
新潟	8	9	18	10	30	16	16	16	14	14	17	17
長野	7	4	6	6	30	16	16	16	16	16	15	15
岡山	2	5	8	16	14	14	14	16	14	10	14	15
朝鮮	1	4	20	42	16	16	16	18	16	10	15	14
静岡	6	7	12	10	14	16	16	20	24	24	15	14
広島	3	20	12	8	16	16	16	18	16	24	15	14
千葉	6	8	12	10	12	14	14	14	14	24	15	14
山口	2	12	10	8	12	14	14	16	16	10	15	14
群馬	2	3	18	8	10	12	12	14	14	14	15	14
栃木	3	4	10	8	10	12	14	14	16	18	14	14
長崎	2	4	24	8	14	16	14	16	6	8	15	14
三重	2	4	8	8	10	12	22	12	14	16	14	14
宮城	8	4	8	10	8	12	12	12	14＋6	10	14	14
茨城	5	4	6	6	10	10	20	12	10	14	14	14
熊本	1	3	6	10	10	14	14	14	12	10	15	14
埼玉	6	7	14	8	10	12	10	12	10	8	14	14
石川	4	4	4	8	6	10	10	10	12	8	15	14
鹿児島	1	3	8	8	10	12	12	12	8	6	14	14
福島	19	8	8	4	8	12	12	12	22	18	13	13
秋田	3	6	10	10	12	12	12	18	10	14	14	12
滋賀	2	4	14	10	10	10	10	10	10	14	10	10
和歌山	1	3	14	8	10	10	10	12	10	10	10	10
中国		1	4	1	16	12	12	12	8	8	10	10
佐賀	1	6	4	0	10	8	8	10	6	8	11	10
愛媛	3	3	6	0	10	8	8	8	8	10	10	10
岩手	2	4	2	4	8	8	8	8	12	10	10	10
大分	1	1	4	4	10	8	8	8	8	6	10	10
岐阜	2	3	2	10	6	6	6	6	6	10	10	10
福井	1	4	4	0	8	6	4	6	6	8	10	10
山形	4	4	8	4	8	10	8	10	10	16	8	8
富山	1	6	2	6	10	10	10	10	8	8	8	8
島根	0	1	10	8	10	6	6	6	6	10	8	8
青森	5	6	4	6	8	8	8	8	8	6	8	8
奈良	1	3	2	6	10	8	8	8	8	8	8	8
香川	0	4	0	10	10	6	6	6	6	12	8	8
鳥取	1	3	6	8	10	6	6	6	6	8	8	8
山梨	2	3	2	8	10	6	6	6	6	6	8	8
宮崎			4	8	6	6	12	4	0	6	8	8
徳島	0	4	2	10	6	4	4	6	4	6	8	8
台湾			4			8	6			2	8	8
高知	0	3	2	6	8	14	4	8	6	8	6	6
樺太			2		4	4	4		2	2	6	6
沖縄					4		4			2	6	6
合計	222	350	598	491	610	644	644	668	656	662	669	656

巻五号）

少女の友が、日本一だの東洋一だのと言つてた時代は既に去りました。今ではもう他の雑誌とは比較にならない程の大部数を発刊してゐるのです。営業部よりの報告に依れば、他の少女雑誌総てを合せた部数と少女の友とは匹敵してゐるそうです。（一九一三年六巻三号）

また、表①でもう一つ注目すべきは東京の数値の変化である。当選者の総合数は年々増えているのに対して、東京の当選者数は減っていることが分かる。年ごとに割合を算出すると、大きく三段階の変化が見られた。一九〇八年では全体の二三％を占めていた東京は、一九一一年では一三・三％となり、一九一四年になると六・六％、一九二五年では四・二％に減っている。

まず、一九一一年の東京以外の地域の割合を見ると、一九一一年の大阪・京都・北海道の割合は一九〇八年からそれぞれ二～三％ほど増えている。そしてその他、一九〇八年の時点では当選者数が一人だった地方の地域も、一九一一年には増加しているところがある。その中で特に変化があったのは長崎や群馬で、こちらも大阪・京都・北海道と同様に二～三％ほど増えている。このことから、一九一一年に東京の割合を減らし、代わりに大阪・京都・北海道などの割合が増え、さらには他の府県も少しずつ増加したことが分かる。そして一九一二年に大阪・京都・北海道の割合が減り、それ以降の年ではこの二府一道にあまり変化は見られない。このことから、東京の割合の変化が大きかった一九一四年と一九二五年では、大阪・京都・北海道以外の府県の割合が増えたということが分かる。

また、一九二五年では、それまで二人とごく少数であった府県も、一九二五年になると六人や八人に増え、最多の東京との差が縮まったことが分かる。このことから、地方の道府県やアジア各地にまで読者が増えたことにより、東京の当選者数が減少したと考えられる。

このように、懸賞当選者の地域分布を調べてみると、一九〇八年から一九一一年にかけて総合数が増えたことや、地方にまで読者が増えていったことが分かった。さらには、中国や朝鮮、台湾や樺太にまで読者が増えたことが分かった。

『少女の友』が広がっていった社会的背景として、ゆとりある暮らしによって、少女に教養や娯楽を与える機会が

増えたことが要因ではないかと考えられる。本田氏が言及するように、明治末期の少女雑誌の隆盛は高等女学校の増加に大きく影響されていると考えられる。しかし、『少女の友』を購買していた少女たちは、一二歳から一七歳の高等女学校の生徒ばかりではなく、六歳から一二歳の尋常小学校の生徒達、そして学校に通っていない子どもたちも購買していたと考えなければならない。

国立国会図書館関西館で確認できる資料で、一九〇九年二巻五号までの資料には、懸賞当選者欄には読者の年齢が記載されている。ここから年齢を調べてみると、最年少で七歳、最年長で一八歳の読者が確認できた。二巻一号の懸賞当選者欄では、一三歳、一二歳、一一歳の順で一二歳以上の年齢が全体の六七％、一一歳以下が三三％いることが分かった。このように一九〇〇年代後半の『少女の友』読者の年齢層はかなり低く、小学校高学年から高等女学校の低学年にあたる年齢層で占められていた。

このことから、『少女の友』の読者が増えた要因として、高等女学校の増加に加え、一九〇〇年の小学校令改正以降に小学校の基準化が進んだことによって識字率が向上した[7]ことも挙げられる。また、男子でも読んでいいかという質問や、教師でも投書しても良いかという質問も記載されているので、ごく少数であったと考えられるが、男子や大人も愛読者として『少女の友』を購買していたことを考慮しなければならない。

第二章　通信の宛先と内容について

一巻三号以降、「私は当誌の愛読者です。皆様ご交際をお願いします。」といった内容の投書が多く寄せられ、愛読者たちの名前が列挙されたコーナーが毎号掲載されている。また、創刊初期の懸賞当選者・通信欄・作文・俳句・和歌などの投書欄には、読者たちの年齢及び細かな住所までもが記載されていた。読者たちはこれらの投書欄に掲載された名前の中から交際する相手を選び、その相手に直接手紙を送ったり、品物を送ってコミュニケーションネットワークを広げていた。そういった直接交際が隆盛する中、記者から読者たちの直接交際に関する注意が促された。

…他人の処へ手紙をやるのに、自分の住所も書いてやらない様な者は、自分から進んで交際をもとめるほどの人間ではない事がわかりきってをります。又、だれ

でもいゝから手紙をくれなどゝいふ事は、何気なしに言はれた事ではあらうが、よく考えて見れば、実に戒むべきことだらうと思ひます。この頃記者のもとへ、男子でありながら女の名にして、諸方の読者へいたづらの手紙を出したものがあるとの報知が、ひんぴんとしてやって来ます。住所を書いてない様なのは、勿論さういふ悪漢に違ひありますまいが、住所を明記してある者の中でさへ、さういふのが大分あるといふ事です。記者は皆様に向かって、決して交際をなさるなとは申しません。又、手紙のやり取りはしていけませんとも申しません。併し世の中には、それに附け込んで、よからぬ戯れをするものもありますから、あまり馬鹿騒ぎをして、交際の何のと仰るのは、少し慎みなすった方がよからうと申すのです。（一九〇八年一巻四号）

このように、直接交際には危険が伴っているため、派手な交際は慎んだ方が良いと注意を促している。また、読者同士の物のやり取りに対して、あまり有益な事ではないから慎んだ方が良いということも記者は述べている。記者にとって読者たちが直接手紙や物のやり取りをすることは、記者の関与できる範囲を越えてしまっており、コントロールできないほど直接交際が盛んになってしまうことは避けたかったのだろうと考える。また、読者からも直接交際の事情を伝える投書が送られてきている。

皆さん、随分世の中には、ずるい人もあればあるものではありませんか。交際したいから何か送ってくれ、などゝ云つて来ますから、早速送りますと、何の返事もないんです。よく〳〵調べてみますと、男でありながら女のふりして、こんな事するんださうです。皆様お気をお付けなさいませ。（一九〇八年一巻五号）

久子さんは、毎月、あらゆる少女雑誌を読んでゐらつしやいます。或時、誌上に、数知れない交際希望者の御名前が載つてゐるのを御覧になつて、ふと、好奇心にかられ、其中の優しいお名の方へ交際を申込みました。間もなく、綺麗な絵端書で、御丁寧な、しかも美しい手跡で、嬉しいお便りがありました。久子さんは、もう、嬉しくてたまりません。今度は、沢山の方へ一々手紙を出しました。其後は、絶えず、多くの諸嬢から手紙が来ますので、始めの様な真情のこもつたお返事をあげることが出来ません。『交際者が多いので、つい、お返事が遅れまして……いつもながらの乱筆乱文…』

などと、終始書いてゐらつしやいます。かうして、沢山なお返事を出した後は、もう、がつかり。大切な復習をなさる勇気もございません。それに、絵端書の交換や、お写真の交換や、其他色々におつかひになるお金も随分であります。お両親様の度々のお注意もおききなさいません。記者様この久子さんは、交際の度を過したのでせうか、それとも、交際の道を誤つたのでせうか。（一九〇八年一巻十号）

直接交際が危険を伴ったり、否定的な側面があるにもかかわらず盛んに行われたのは、『少女の友』では個人宛の投書が誌上に掲載されることがほとんどなかったことが大きな要因として考えられる。創刊初期の通信欄のほとんどは記者に宛てたもの、または記者や読者全体に宛てたものであった。それと比べて少数であるが、自分と同じ居住地域の読者へ投書を催促するなどの、特定の地域に向けた投稿がみられた。個人読者に向けた投書は記者によって没書とされ、基本的に雑誌に載ることはなかった。個人読者宛ての投書で掲載された特別な例としては、読者の作文や和歌に対する感想を綴ったものが掲載された。しかし住所を教えて欲しいといった内容のものや、手紙を送って欲しいといったものは掲載されることはなかった。

特定の人物に宛てた私的なメッセージが最初に登場するのは明治中期の少年誌である。一八九五年から一九三三年に発行されていた『少年世界』では、投稿欄で優秀な成績を修めた者への賛辞や文通を求める手紙などが掲載されている。[8] しかし明治中期に創刊された『日本之女学』『家庭雑誌』などの婦人誌においては、文芸投稿欄や編集者への質問はあったものの、個人読者間の自由なやり取りを可能にするような投書欄は設けられていなかった。一九〇一年創刊の『女学世界』にも創刊当初から読者欄があったわけではなく、「誌友倶楽部」という名の読者交流を目的とした投稿欄が登場し、一九一〇年頃より読者同士の交流が活発化していった。[9] 同様に『少女の友』でも読者同士で自由に誌上交際できる場を求めており、記者へ要望する投書が多くみられた。

愛読者がお互いに通信の出来る談話室を設けてください。

↓（記者言ふ）一人と一人とのお話を、多数の人の見る雑誌の上へ載せる事は出来ません。其代りに口に出して言ふ人は一人でも、多くの人が矢張さう思ひさう

な事柄ならば、何でも載せます。（一九〇八年一巻四号）

談話室を設けてくれとの聲が大分盛んになりました。そして其談話室へはいりさうな原稿も三つ四つ送って来ました。その原稿といふのは『誰々様お手紙有り難う、あなたの住所を知らして下さいな』とか或は『どなたでもいゝからお手紙を下さいな、きっと返事をあげますから』といふ事ばかりです。前にも申しました通り、誰が読んでもわかるし、又多少の面白味があるものならば、本誌は何でも載せるつもりです。但し『誰々様住所を知らしで下さいな』とかいふ様な事は、他の雑誌では載せてゐるかも知りませんが、この『少女の友』では御ことわり申します。・・・（一九〇八年一巻四号通信）

このように『少女の友』でも一九〇八年には誌上交際できる場を希望する声が多くなった。しかし、当時は少女向け雑誌での誌上交際は一般的ではなかったため、少女たちは誌上交際が盛んであった少年向け雑誌を真似て、誌上交際する場を要求したと考えられる。こういった読者の要望から、一九〇八年一巻六号で「談話倶楽部」という名のコーナーが開設された。しかしそのコーナーは「記者、寄稿家、読者が、気安く談笑し得る場所です。遠慮のいらない極く内々の話を為し得る場所です。」と謳いながらも、実際は読者や記者が課題に沿って作った作文を掲載するコーナーであったため、読者たちが求めていた自由に読者同士が誌上交際できる場とは異なるものであった。

談話倶楽部は課題の外自由に話の出来る様にして下さい。

↓（答）その自由のお話は、どし〴〵通信へお出し下さい。（一九〇八年一巻八号）

記者によって誌上交際を阻止され続けたが、読者たちによる他の愛読者への興味は尽きなかった。直接交際での顔の見えない交際だけでは満足せず、愛読者たちの顔写真を掲載して欲しいという要望が多く寄せられた。記者はそれに応えて「本誌愛読者」というかたちで写真を紹介し、読者たちの写真をさらに多く投稿するよう促した。また、愛読者大会を開いて欲しいという要望も多く寄せられた。一九〇九年四月に初の少女の友愛読者大会が東京で開かれ、その翌月にも京都で大会が開かれた。さらに、地方などの愛読者大会が行われない地域では、読者が主催となって参加者を募り、愛読者会を開いて読者同士の交流を楽しんだ。

名古屋市愛読者の皆さんに申上げます。今度当地に少女の友愛読者大会を開かうではございませんか。お賛成下さいますなら、誠に差出がましく存じますが、どうか私の所へ入らしつて下さいませんか。集つて御相談いたしませう。（一九〇九年二巻四号）

金沢の愛読者の皆さん。今度『少女の友』愛読者会を開きたいと思ひます。御同意の御方はどうぞお力をお協せ下さいませんか。（一九〇九年二巻五号）

一九〇九年二巻四号からついに、読者が待望していた自由に誌上交際できる読者同士というコーナーが通信欄の中に設けられ、そこから個人間での私的な通信が多くみられるようになる。表②は読者同士が設けられた一九〇九年二巻四号から、廃止される前の一九一一年四巻十三号の通信欄に寄せられた投書を宛先別にまとめたものである。この表からは、一九一一年四巻五号で個人宛の投書が大きく増えたと同時に、特定団体への投書の数も増えたことが分かる。個人宛の投書の内容としては、二巻五号までのものは読者が作った作文や和歌、俳句に対する感想が多かった。それ以外の内容では、交際の申込みがみられるようになった。しかし個人宛の総数は二巻四号では六件、次号では一件とかなり少なめであった。このように少ない件数であったのは、読者同士というコーナーが設置されるという事前予告が無かったからであると考える。それに加えて、少女雑誌での誌上交際はまだポピュラーではなかったことから、少女たちは誌上交際に慣れていなかったということ

表②

宛先	2巻4号	2巻5号	4巻5号	4巻8号	4巻13号
愛読者	新71	新59	新79 以前から 38 一巻から 14	新52	新77
季節の挨拶	2	3	5	25	43
その他全体へ	1		1	1	1
記者宛て	6 ［内4件水裏先生の病気を心配する投書］	3	9	82 ［内68件小葉先生の父への悔やみ状］	44 ［内16件水裏先生全快おめでとう］
個人宛	6	11	109	88	90
特定の団体へ	1	1	16	16	7

が考えられる。そして一九一一年四巻五号で個人宛と特定団体宛ての投書が増えた理由としては、愛読者大会が各地で行われ、そこで読者同士の交流があったからではないかと考える。特定の団体宛ての投書の内容としては、自身の住む地域の読者に愛読者大会を開こうと呼びかけるものや、愛読者大会の幹事への感謝を伝えるものが多かった。

そして表③は特に個人宛の投書数が多かった四巻五号・八号・一三号の内容を順位付けしたものである。五号では懐かしさや変わりはないかと、同郷の読者に対して募る思いを伝えているものが多かった。しかしそれは号数が進むにつれて減っていき、代わりに「～さんでしょう？」と他の読者の本名を当てる投書が増えている。このような内容の投書や、反対に「私をご存じ？」と自分が誰であるのか当てさせる投書の多くは、同郷や同じ学校に通うもの、またはクラスメートなど、かつての知り合いや今住んでいる地域が同じ者に宛てられたものである。このことから、少女たちは遠くまで交際圏を広げようとするよりも、身近にいる者たちとの交流を誌上で楽しんでいたのではないだろうか。

しかし、早くも一九一二年五巻一号で読者同士というコーナーは廃止されてしまう。

私共が、女学校や小学校へ参りまして「少女雑誌に就ての御希望を伺ひたうございます」と申し上げると「先

表③

	4巻5号	4巻8号	4巻13号
第1位	おなつかしい・ お慕わしい・ お変わりない？ 32件	おなつかしい・ お慕わしい・ お変わりない？ 17件	～さんでしょう？ 本名・住所教えて 17件
第2位	～さんでしょう？ 本名・住所教えて 10件	お便りがない・ 御投書遊ばせ 16件	個人間でしか 分からない内容 13件
第3位	お便り・お尋ね ありがとう 10件	～さんでしょう？ 本名・住所教えて 13件	おなつかしい・ お慕わしい・ お変わりない？ 11件
第4位	個人間でしか 分からない内容 8件	個人間でしか 分からない内容 13件	お便りがない・ 御投書遊ばせ 10件
第5位	私をご存じ？・ 私は～です 8件	私をご存じ？・ 私は～です 10件	私をご存じ？・ 私は～です 10件
第6位	ご無沙汰 ごめんなさい 7件	お便り・お尋ね ありがとう 5件	お便り・お尋ね ありがとう 10件

づ通信欄にある読者同士の交際をお止め下さい」といふお答えが、きまったやうに、先生方のお口からでるのでございます。…或いは父兄諸氏の門を叩き、或いは教育家諸氏の教を仰ぎ、深慮熟議を重ねること殆ど半歳、遂に涙を揮って斯欄を廃する事に決しましたのです。（一九一二年五巻一号）

このように学校の教師や父兄が誌上交際を禁止するよう請求した理由は、顔の見えない者同士での交際を完全に封じるためではないかと考える。先ほど述べたように、直接交際での危険を防止するためであったり、金銭支出の問題があったからだと考えられる。それに加えて、誌上交際は少女たちがペンネームを使って教師や親の目の届かないところでの交際を可能とするので、大人のコントロールの及ばないところで交際が行われるということも大きな要因となっていたのではないだろうか。

読者同士コーナー廃止以降、個人読者間の通信は無くなったが、そのまま通信欄が廃れてしまうということはなかった。個人読者間の通信の代わりに、記者との通信が隆盛を見せることとなる。創刊当初の記者宛ての通信の多くは投書に関する質問や、前号掲載の小説に対する感想がほとんどであった。この頃の投書のほとんどは、感想では「～先生の小説は」と呼びかけるものが多いが、質問やその他では「記者様」と呼びかけているものが多く、読者と記者との間には、ただ雑誌を購買して作文や和歌を投書してくれる読者、雑誌を編集してくれる記者といったようにそれ以外の関係性は見出せない。しかし談話倶楽部が設けられて以降、読者と記者との間に変化が生まれていく。一巻六号の談話倶楽部の開設時に、記者の一人である石塚月亭が投稿した作文に対して、多くの読者が好感を持った反応をみせている。

私は坊ちゃんです。私は、お姉さんが大好きだけれど、私には一人もお姉さんがありません。だから、お姉さんがほしくて、ほしくてたまりません。皆さん、私のお姉さんになって下さいな。そして、私を可愛がって頂戴な。・・・（一九〇八年一巻六号談話倶楽部「私は坊ちゃんです。石塚月亭」）

▲月亭先生、あなたはお姉さんがほしいと仰しやいましたね。私そのお姉さんになりませう。私活発な坊ちやんが大好きですよ。だけどうちには坊ちやんがないんですもの。先生、ほんとに姉さんにして頂戴な。だ

けどお姉さんが小さくて、坊ちゃんが大きくて、そしてお髭をはやしてゐちやおかしいわね。

▲月亭先生は坊ちゃんですつて、私も姉さんになつて可愛がつてあげませう。そして母様に貰つたお菓子は皆あげませう。併し坊ちゃん、だゞをこねては、いやですよ。（一九〇八年一巻七号）

翌号の談話倶楽部でも、読者からの作文一一本中四本が月亭坊ちゃんと呼びかけているものであった。ここで初めて記者をあだ名で呼ぶ様子がみられた。さらに一九〇九年の通信欄では他の記者のことも「記者様」ではなく、「～先生」と呼ぶ姿が多くみられる。また、通信の内容は感想以外にも、記者自身についての質問や、『少女の友』とは全く関係のない内容のものがだんだんと増えていった。

本誌の記者様方は、お揃ひで水がお好きでゐらつしやいますのね。水裏先生、素水先生、草水先生、峡水先生、それから湘雨先生もやはり水に御縁がおありでゐらつしやいますね。それですのに、月亭先生ばかりはどうあそばしたのでございませうか。（一九〇九年二巻五号）

記者様並に皆々様、御機嫌よろしうございますか。四月には私の町のお祭りで、花火が沢山あがります。それはさうと、水裏先生は桃の花が大変お好きださうですね。私の家には沢山ありますからお送りいたしませうか。さよなら。（一九〇九年二巻五号）

一九一一年の通信欄では、記者が読者の投書に一言コメントを添えるようになり、「先生当地に遊びに来てください」「先生をお見掛けしました」といったような感想以外の投書がさらに増えた。一九一二年の通信欄では、記者に冗談を言ったり、記者が悪口屋・忠告屋・差出屋などのペンネームを使ってコメントすることもあり、ユーモア溢れる通信欄となっている。

水裏先生、大変なことが出来ましたの、私が内証で数へるから誰にもいはないでねえアノー佐賀の皆様が、先生が一度もいらつしやらないから、一つこちらでも水裏先生征伐隊を組織しようと相談が定つてをりますの。この征伐隊の侵入しない前に、早くいらつしやいな、先は先生のお体の危険を慮り、取りいそぎお知らせまで

↓ヤーこれはまた飛んだお知らせ、もうとても生命覚束ないわい（水裏）（一九一二年五巻十号）

峡水先生、あなた、随分肥つていらつしやるのねえ、私の母さんはまだ〳〵肥つてゐますよ。比べつこしてごらんなさいな。

↓負けると恥かしいからいや（峡水）（一九一二年五巻十号）

水裏先生は、犬がお嫌ひですか、日本少年にも出てゐますし、ずつと前の実業之日本にも見えますが

↓嫌ひどころか好きで〳〵寝言でも犬の事ばかりですよ（悪口屋）（一九一二年五巻十号）

このように読者と記者の関係性が縮まっている様子が伺える。読者が記者に甘えるような通信が増えた要因は、各地で行われる愛読者大会や談話倶楽部で掲載される記者の作文が大きいと考える。愛読者大会で実際に記者の姿を見るという経験や、談話倶楽部の作文で記者一人一人について知る機会が増え、読者にとって記者はより親しい存在へと変わっていったのではないだろうか。

読者と記者間での通信はますます隆盛を極め、一九一三年六巻一四号では没書になる人が増えたことにより、没書病室なるものが設置された。

先生、お願ひがありますの。少女の友の愛読者がだん〴〵ふえてゆくので、投書熱や投書病も従つてふえて行くでせうと思ひますそれですから、この通信学校の中に病室をこさへて下さいな。

↓これはなるほどいゝお思ひ付きでしたねえ。早速来月号から先ず没書病の患者室を設けませう。次に其の院規を定めますからようく御覧下さい。

一、二度以上没書してこれまでいつも没書になつてゐる人は、其府県名と姓名とを記して通信欄へ申込むべし。

二、書き方は通信文と同じく、私儀没書病患者に候間御入院お許し下され度候、と書くべし。

右の通りお申込みにならない方は、すべて没書病にかゝらない人と認めますよ。（記者）（一九一三年六巻一三号）

翌号には八八名もの入院患者の名前が列挙されていた。さらにその翌号の没書病室では、「先生私の病気はどこが悪いの」「なかなか治りそうにありません」といった、ごっこ遊びに近いような通信が繰り広げられた。また、一九一四年七巻一一号あたりから戦争色が強くなっているが、通信の内容は以前とは変わらず、『少女の友』とは全く関係

のない内容のものや記者に甘えたような文面が多かった。戦時下において、このような内容が多かったのは、現実を逃避したいという思いや、いつもと変わらない通信欄という場所に安心感を覚えていたのではないかと考える。実際に掲載されている小説をもっと明るい内容のものにして欲しいという読者からの要望もあった。

ここまで創刊一九〇八年から一九二〇年代後半における通信欄の隆盛をみてきたが、大きく分けて二つの盛り上がりがあったという印象を受けた。まず一つ目の盛り上がりは一九一一年の誌上交際が行われていた時期である。そして二つ目は一九一三年の読者と記者間で通信が行われた時期である。一方は読者同士、もう一方は読者と記者と、宛先は異なるものであるが、誌上交際の相手は実は顔見知りということが多かったり、記者も愛読者大会や談話倶楽部でよく知った存在であった。このことから、危険を冒してでも交際圏を広げるというよりも、身近な存在とのコミュニケーションを楽しみたいという思いが強かったのではないだろうか。

第三章　少女像の表れ

創刊初期において、記者の少女像が明白に表れている記事が度々掲載された。

かれもいけない、これもいけないと言って、記者は読者をどうするつもりかと、問ふ人ならば斯う答へませう。記者は皆様を、心の美しい少女にしたいのです。行の正しい少女にしたいのです。常に愉快に満ちている、優しい心掛けの少女にしたいのです。女は須らく女らしくなければなりません。女が男のまねをしたって、とうてい男に勝たれるものではありません。文章を作るたって女らしい思ひやりの深いもの、和歌をよむたって女らしい優しいもの、俳句をつくるたって女らしい美しいもの、といふ様に、女はどこまでも女らしくして貰ひたいのです。記者は、いかにしたならば、此大目的を達する事が出来るかと、日夜心を痛めているのです。（一九〇八年一巻四号）

意味も知らないむつかしい言葉を使つて喜んだり、うはべばかり飾つて中身のない美しさを誇つたりする少女はよくありません。本誌を読めばそんな少女はなく

なります。日本の少女は無邪気でなければいかぬ、可愛らしくなければいかぬ、顔も心もいつもニコニコしていなければいかぬ、といふのが本誌の主義です。本誌を読めば少女はみんな無邪気になります。可愛らしくなります。顔も心もいつもニコニコして来ます。無邪気と不真面目とは違ひます。不真面目は本誌の敵です。本誌はどこまでも真面目です。（一九一四年七巻十四号）

このように投書の仕方や作文を作る時の注意を促すときに際して、記者の少女イメージが表された記事が併せて掲載されることが多かった。このような記事が掲載されたのは、記者が投書の選別に労するからという理由からだけではなく、こういう少女になって欲しいという強い思いを読者に伝えるためである。また、記者が読者に求めていたものは「心の美しさ」であると考えられる。いくら教養が出来たとしても、何をするにしても、そこに心の美しがなければならないと記者は語る。その心の美しさこそ少女らしさであると。このような記者の少女像に対して、少女たちはそれをどのように受け止めていたのかということを次に見ていきたい。

前号、読者間の交際に就ての記者様の御教訓、誠に有り難うございました。又記者様が私共読者のために、かほど迄に御熱心におつくし下さるかと思ひますと、嬉しくて〳〵何共御礼の申し様も御座いません。されば読者諸嬢様方よ、記者様のこのお心尽しの萬文一に酬ゆる様、又『少女の友』愛読者の名に恥づかしからぬ様、慎み深い、そしてやさしい美しい心がけの少女とならうではありませんか。（一九〇八年一巻五号）

もちろん記者の意見に反するような投書は、記者の判断で没書となる可能性が高いと考えられる。しかし、こういった投書のキーワードとなっている言葉も「心の美しさ」である。また、記者の言葉を受け取るのは「私達」であるという意識や、記者からの言葉を受け止めた上でさらに他の読者に呼びかける姿が見られる。このように読者が他の読者に呼びかける様子は度々みられた。

皆様、『少女の友』はだん〳〵と立派になつて行きますのね。今度から談話倶楽部が出来たばかりか、なつかしい愛読者諸嬢のお顔まで見られるかと思ひますと、嬉しくてなりません。此際私共は益々勉強して、『少女の友』の愛読者として、恥かしくないよーな、美し

い心の少女にならうではありませんか。（一九〇八年一巻七号）

私は『少女の友』ほど清い、面白い雑誌はないと思ひます。殊に通信には、人の悪口などは少しもなく、みな為になることばかりあるのですもの、本統（ママ）にうれしうございます。皆さん、お互ひに励み合つて、本誌を盛んにしようではございませんか。（一九〇九年二巻二号）

このように、互いに励み合おうということを呼び掛けている投書は、投稿欄で頻繁に賞をとっているスター投稿家によって投稿されたものがほとんどである。そして互いに励み合い、『少女の友』という雑誌を共に盛り上げようとする意識こそが、「少女の友の愛読者」という一つの共同体意識へと繋がったと思われる。スター投稿家たちを中心にして「少女の友の愛読者」という共同体が成り立っていったといっても過言ではないだろう。共同体意識が芽生えると、他の少女向け雑誌に対してライバル意識が高まりだした。

皆様も多分御存じでございませうが、九月の少女世界通信欄に、一少女として、『少女界は厭ね、記者様の事を坊ちやんだの、ヤレ鼻歌だのと、清い少女のいふ言ではない』と、かう書いてありました。すると今度は少女界の読者の方も、十月の通信欄に、いろいろ皆様で少女世界に対して仰しやいました。中には私少女世界は大嫌ひよ、などゝ強い事を仰しやる方もありました。しかし少女世界の方も別に悪気があつていつたのでは無いでせう。けれど誰でも自分の愛読して居るものほど好い物はないと思ふのは同じですから、少女界の読者の方が御立腹なさるのも当然だと思ひます。それに少女世界の方でも、坊ちやんとは仰しやらぬまでも、祖父様などと仰しやつて居る人さへあるのですもの。殊に何方も美しい少女方ではありませんか。お互いにつまらぬ事をいひ合つて居るのは他から見ても、余り好いものでは有りません。それを思へば、わが『少女の友』には、外面ばかり優しくて、内心にとげを持つてゐる様な方は一人も無く、心から美しい方ばかりで、通信でも何でも清くて、ほんとに嬉しうございます。皆さんどう思召しますか。（一九〇八年一巻十号）

この投書では、他雑誌と『少女の友』を比較することに

よって、『少女の友』がいかに素晴らしいのかということを説いている。さらにここでも「心の美しさ」が強調されており、少女たち自身も「心の美しい少女」があるべき姿だと認識していたと考えられる。

さらには、読者たちによって他雑誌で同じ文を投稿した者や、男子であることを偽って投稿する者を告発する動きがみられた。

先達つて引越しの時、棚から出ました絵葉書世界の表紙を見ますと、『女優と入浴』といふ所に、本誌第二巻一号の俳句合わせ一等当選にある佐治君子さまのと同じ俳句がありました。どうしたのでせう。

↓他にもこれと同じ通知をして下すつた方がありまして、少なからず驚きました。記者はこの清い皆さんの中に、一人でもさういふ方があつたといふことを、深く悲しみます。佐治さんどうぞ心を改めて下さい。（記者）（一九〇九年二巻四号）

記者様、本誌へ投書なさる丸尾正子さんは男子でせうか、女子でせうか。ある雑誌には丸尾正と書いて、僕なぞと書いてありますのよ。又、正子さんのお友達らしい方か、正子さんのことを丸尾正君なぞとも書いてあります。どうしたんでせうか。（一九〇九年二巻五号）

このように告発する行為は、『少女の友』という雑誌に対する帰属意識に基づくものであると考える。自身の所属する共同体の境界に何者かが侵入してくることを防ぎたいという意識、さらには異質なものを排除しようとする意識が強かったと考えられる。

記者が少女イメージを提示するということが、どのような少女が求められているのかということを読者が理解することに繋がり、さらには共同体の形成にも大きな意味をもつものであった。読者たちは記者から提示された少女イメージを受け止め、それを志す対象とした。そして他の読者と共に高め合い、共に同じ雑誌を応援し、共に雑誌を作り上げていくという意識があったということが、『少女の友』が長く愛され続けた理由ではないだろうか。

終わりに

第一章では懸賞当選者欄の分析から、『少女の友』の発行部数の増加、そして地方に渡るまで読者が広がっていったということが分かった。そして第二章では通信欄を分析

することによって、創刊初期では個人同士での交際の隆盛、そして一九一一年からの読者と記者との通信が隆盛したことが分かった。最後に第三章では記者及び読者が持つ少女像について分析した。記者が提示する少女像によって、読者たちの中で共同体意識へと発展していった。

投書欄は少女たちが自分の意思を表せる場であり、他の少女がどのような考えを持っているのかを学ぶ非常に大切な場である。そこで芽生えた共同体意識は互いに、美しい心の少女への成長や、雑誌を応援しようという意識を高め合った。自分以外の愛読者の存在を実感することによって、自分自身も愛読者の一人であるという自覚を生んだ。そして、少女たちは家庭内での娘という役割を越えて、主体として役割に縛られない個々の存在へと成長していった。そういった主体性が確立した個々の存在同士が、互いに他者への共感を求め少女共同体というものを作り上げた。このように生成された少女共同体だからこそ、家父長制意識が根付いていた家庭や学校は、少女共同体を危険な存在であると認識したのではないだろうか。

行動範囲を広げていこうとする少女共同体、そしてそれを阻止し管理する大人達の攻防が『少女の友』投書欄で確認することが出来た。少女達と大人達両者の意見を汲み取りつつ、記者によって投書欄は様々に変容が繰り返された。このように投書欄は変容を遂げながらも、時代が進むにつれて隆盛を極め、『少女の友』の購買数増加に大きな影響を与えた。

註

（1）川村邦光『オトメの祈り―近代女性イメージの誕生』（紀伊国屋書店、一九九三年）

（2）本田和子『女学生の系譜―彩色される明治』（青土社、一九九〇年）

（3）永井紀代子「誕生・少女たちの解放区―『少女世界』と「少女読書会」」『女と男の時空―日本女性史再考9　鬩ぎ合う女と男―近代』（藤原書店、一九九五年）二七八～三一一頁

（4）遠藤寛子『『少女の友』とその時代―編集者の勇気　内山基』（本の泉社、二〇〇四年）

（5）今田絵里香『「少女」の社会史　新装版』（勁草書房、二〇二二年）

（6）佐藤（佐久間）りか「「清き誌上でご交際を」―明治末期少女雑誌投書欄に見る読者共同体の研究」（『女性学』4、一九九六年）一一四～一四一頁

（7）深谷昌志『子どもの生活史―明治から平成』（黎明書房、一九九六年）

（8）成田龍一「『少年世界』と読書する少年たち―1900年前後、都市空間のなかの共同性と差異」（『思想』八四五号、一九九四年）一九三～二二一頁

（9）佐藤（佐久間）・前掲注（6）、一一七頁

〔付記〕

小論は、奈良大学文学部史学科卒業論文として、二〇二二年一二月に成稿、提出したものである。提出後、同年一一月四日付で、前川弥生「〈少女らしさ〉の言説空間―雑誌『少女の友』における読者投稿欄の分析―」（同志社女子大学大学院文学研究科紀要二二号、二〇二二年）が機関リポジトリーにおいて公開されていることに気がついた。小論の本誌への発表にあたって参照すべき重要な論考であると思われるが、「要旨」のみの公開となっているため触れることができなかった。